

中大連携によるキャリア教育実践の試み

—修学旅行生を世田谷キャンパスに迎えて—

太田 麻衣子・郡司 菜津美・助川 晃洋

I 執筆意図

近年、中学校の修学旅行のあり方が多様化している。東京・横浜の観光名所や人気スポットに足を運ぶ。京都・奈良の神社仏閣を参拝し、歴史遺産をめぐる。広島・長崎や沖縄で平和の尊さを心に刻む⁽¹⁾。北海道や九州の雄大な自然（例えば知床や阿蘇など）を満喫する。志賀高原や越後湯沢でスキーをする。こうした（もはや）伝統的なプログラムが継続されている一方で、生徒たちが（グループに分かれて）企業や大学などを訪問し、単なる見学にとどまらず、その場所ならではのユニークな学習や活動を体験するケースが増えている。

そして国士舘大学文学部教育学科教育学コースでは、正規の「予定表」に記載されているという意味で学部公認の行事として、2024年6月4日（火）午後に、世田谷キャンパスにおいて、愛知県名古屋市内の中学校の3年生34名（と引率教師3名、NPO法人スタッフ1名）を受け入れた。本稿（のⅡとⅢ）は、事前準備から事後処理に至るまでの庶務・運営全般、中学生と大学生の交流イベント（於・大講堂）の企画・進行のそれぞれを中心的に担当した教員によるレポートであり、大学が社会貢献の役割を果たした事実を証明するドキュメントである。なお本学公式HPには、当日の様子を紹介する記事が掲載されている⁽²⁾。併せてご一読いただければ幸いである。

Ⅱ 全体の概要

今回の活動は愛知県名古屋市が推進する、名古屋市内中学校におけるキャリア教育活動の一環として行われたものである。そのねらいは中学生のうちから大学を見学し、大学生と交流することによって、大学進学も見据えた幅広い将来設計ができるようになることにある。本コースには教育に関心のある学生が多いだろうとのことで声がかかったが、学部としてはまだ中大連携に馴染みがなく、当初は戸惑いの声もありはした。しかし、大学として社

会に貢献できるよい機会であり、学生にとってもよい社会経験を積む機会になることから、コースとしてお受けすることにした。

今回、窓口となられたのはキャリアサポート事業を推進されているNPO法人であり、担当の方とは約1年の準備期間を通じてZoomやメール、時には電話により打ち合わせを重ねた。名古屋市としても都内でのこうした試みは初とのことで、本コースからも学生との交流だけでなく、学食体験なども盛り込みたいと提案した。ただ、本活動は修学旅行における都内分散学習のひとつとして位置づけられており、本学を含めて四つの大学に分散して行われるものであった。そのため、他大学との調整から学食体験は見送りとなった。

四つのうちのどの大学を訪問するかは分散学習のグループごとに選択する形となっており、その際の参考資料として、A4サイズ1枚で大学紹介を作成してほしいとの依頼もあった。まず担当の方からその案が示されたのち、本活動にファシリテーターとして参加する学生たちが資料を作成した。生徒たちはそれをもとに訪問する大学を決め、事前学習としてその大学の調べ学習を行い、保護者の方々も交えた場で大学紹介プレゼンテーションを実施したとのことである。

レクリエーション当日、生徒たちはまず少人数グループで都内各所を自由にめぐったのち、15時45分までに本学に集合することになっていた。都内の公共交通機関の複雑さに、はたして迷わずに無事やってこられるだろうかと一抹の心配もあったが、生徒たちが色々工夫しながら集まってくる様子には胸を打たれるものがあった。活発な中学生たちの力強いエネルギーは、本活動に参加した学生たち以外にとっても刺激的だったらしく、会場の近くを通りがかった学生・教職員の多くが足を止め、興味深そうに活動の様子を観覧していった。実際の活動内容については、本稿Ⅲならびに郡司（2024）を参照されたい。

修学旅行後、中学校では本活動の成果に関するアンケート調査のほかに、事後学習として生徒たちによるふりかえり発表が行われたとのことである。アンケートは3点満点で行われ、プログラム内容は満足できるものであったかという問いには2.91点、大学への興味・関心度に変化はあったかという問いには2.70点という評価を得た。ナビゲーターの方からも、生徒たちは修学旅行前からとても楽しみにしている様子であり、結果として想像をはるかに超えるほど大きな刺激になったようであるとのお言葉を頂戴した。

Ⅲ 交流の実際

本章では、(1) 当日までの準備、(2) 当日、(3) 事後の振り返りの学生の活動の概要について示す。活動の詳細及び交流を通しての学生の学びについては、郡司（2024）を参照されたい。

(1) 当日までの準備

本活動は郡司ゼミの学生らが主体となって実施された。郡司ゼミの学生は12名（3年生5名、4年生7名）在籍しており、全員が何らかの段階で準備に参加した。週に一度のゼミの時間を含め、それ以外の時間にゼミ室に集まり「中学生が楽しく学べるために」をモットーに、全体の流れ、具体的な指示の仕方、中学生の動線や必要な物品の確認といった多岐に渡る学習環境デザインの詳細を学生同士で確認しあっていた。必要な教材教具は教員が準備し、学生がそれを活用した。

(2) 当日

当日は、教育実習中の4年生4名を除き、8名が参加した。また、郡司の講義を受講している中国からの留学生5名（大学院1年生4名、2年生1名）が日本の中学生の実際を知りたいという動機で参加した。

当日は、予行演習（13:00～15:00）と本番（15:30～18:00）の二部に分けて活動を行った。活動は「共同」をテーマとし、具体的には①大学の学内探検と②インプロゲームを実施した。予行演習では、当日だけ参加した留学生らを対象に、実際の流れを確認しながら活動のイメージを具体化した。

① 学内探検では、4つのチームに分かれて国士舘大学構内の各所をまわりながらクイズを出題し、キーワードを集めてもらった。大講堂に参集した後、各チームが集めたキーワードを揃えて、ゴールの言葉「こくしかんだいがく」を全員で完成させた。その際、自然と拍手喝采が起きたのは印象的であった。

② インプロゲームでは、(a) ペンのダンス（ファシリテーターの指示通りに1本のペンを2人で無言で共同しながら操作する遊び）、(b) ワンワード（1人1文節ずつつなげて1人の人間のように話す遊び）、(c) イルカの調教師（1人のイルカ役を「リン」というセリフだけでみんなで応援してお題の動きを当ててもらう遊び）を実施し、遊びながら他者との関わり方について考える時間となった。学生達は、中学生の活動を支えながら「教育は共同である」ことを体験的に学んでいる様子であった。

（3）事後の振り返り

事前準備に参加した郡司ゼミの12名全員と、留学生5名を対象に、活動に参加したことによる学びについて振り返る時間を設けた。詳細は郡司（2024）を参照されたい。

Ⅳ まとめと今後の展望

中学校側からは、今回のプロジェクトについて、丁寧なお礼の言葉を頂戴するとともに、生徒の将来的な進路選択に資する有益な取り組みであったとの評価を得ることができた。参加した子どもたちからも、総合的な学習の時間での振り返りを経て、好意的で前向きなコメントがたくさん寄せられている（いずれもメールによる）。また年少者の相手をしてくれた教員志望の学生にとっても、自己の適性を見つめ直し、コミュニケーション（対人関係）能力を高める上で、とても貴重な（一種の）実習の機会になったように思われる。遠く離れた公立中学校と私立大学がつながり、互いに協力し合い、双方にとってwin-winのキャリア教育実践を創造し得たことを心から喜びたい^{（3）}。

今回のかかわりがこれから先も続いていくのかどうかは、実はよくわからない。しかし私どもの教室の基本スタンスとしては、オフィシャルなルートを通じて申し込みがあった場合はもちろん、たとえ飛び込みに近いものであっても、学外からのあらゆる要請に対して、寛容かつ柔軟な姿勢で向き合うことを心がけ、常に開かれた組織でありたいと思っている。そのための第一歩を踏み出すことができたとは（どうやら）考えてよいのではなかろうか。

注

- （1）城丸章夫著、城丸章夫著作集編集委員会編『城丸章夫著作集第9巻 平和と教育論』青木書店、1992年
鳥越一朗『「オキナワの苦難を知る」伝えていこう！平和～沖縄平和学習に向けて読む本～』ユニプラン、2020年
藤原幸男「平和教育と修学旅行」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第9号、琉球大学教育学部附属教育実践総合センター、2002年3月、pp.69-80.
藤原幸男「沖縄と平和学習修学旅行」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第20号、琉球大学教育学部附属教育実践総合センター、2013年3月、pp.159-168.

文沢隆一編、広島平和記念資料館監修『子どもたちの見たヒロシマ 修学旅行感想文集』汐文社、1982年

松元寛『広島長崎修学旅行案内 原爆の跡をたずねる（新版）』岩波書店、1998年

(2) <https://www.kokushikan.ac.jp/faculty/letters/news/001350.html>
(参照2024-10-06)

(3) 天谷祐子「中学校におけるキャリア教育に寄与する学校外機関との連携や資源活用のあり方ー大学が参画可能な視点とはー」『人間文化研究』第41号、名古屋市立大学大学院人間文化研究科、2024年1月、pp.1-13.

河崎智恵・岩本廣美・仲川元庸「教員養成系大学におけるボランティアを核としたキャリア教育の実践」『奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」』第3号、奈良教育大学大学院教育学研究科専門職課程教職開発専攻、2011年3月、pp.21-28.

参考文献

青島範明・加藤英明「中大連携教育における21世紀型スキルの開発ー静岡北中学校と静岡大学教育学部の連携におけるカメ類の研究を通じたアクティブ・ラーニングの成果と課題ー」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.26、静岡大学教育学部附属教育実践総合センター、2017年3月、pp.249-253.

青島範明・加藤英明「中大連携教育における21世紀型スキルの開発Ⅱー静岡北中学校と静岡大学教育学部の連携におけるインセンティブ・レクチャーを通してのディープ・アクティブラーニングの成果と課題ー」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.29、静岡大学教育学部附属教育実践総合センター、2019年3月、pp.236-244.

浅井治平『修学旅行のあり方と指導法』古今書院、1952年

井陽介・渡邊流理也・溝川藍・藤崎眞知代「体験活動の経験が学生の教職への進路選択に及ぼす影響」『明治学院大学心理学紀要』第26号、明治学院大学心理学部、2016年3月、pp.13-25.

家本芳郎編著『遠足・修学旅行』あゆみ出版、1983年

井上徳之・濱田知美「大学との連携による中学校でのSTEAM教育の開発ーシリーズ授業による探究的学習・発表の指導効果ー」『中部大学教育研究』第22号、中部大学大学企画室高等教育推進部、2022年12月、pp.1-11.

- 上野山裕士・永瀬節治「中大連携の効果とあり方に関する一考察－伏虎中学校の閉校にかかる中学生と和歌山大学生との協働的实践を事例に－」『観光光学』第17号、和歌山大学観光学会、2017年9月、pp.35-46.
- 片寄俊秀『商店街は学びのキャンパス 現場に学ぶ まちづくり総合政策学への招待 まちかど研究室「ほんまちラボ」からの発信』関西学院大学出版会、2002年
- 河上婦志子・鈴木浩「生徒の学び・学生の学び－中大連携の試み」『神奈川大学心理・教育研究論集』第26号、神奈川大学教職課程研究室、2007年3月、pp.83-98.
- 高文研編『修学旅行企画読本』高文研、1995年
- 郡司菜津美「キャリア教育としての中大連携による教員養成課程の学生の学び－中学生の学校訪問の企画・運営を振り返る学生らの語りから－」『教育学論叢』第42号、国土館大学教育学会、2024年11月、pp.1-18.
- 後藤太一郎・本田裕・新居淳二・荻原彰・伊藤信成・西岡正泰「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトによる中大連携活動の実施と課題」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第27号、三重大学教育学部附属教育実践総合センター、2007年3月、pp.111-116.
- 小西伴尚・湊浩之・川田博基・石井智也・平賀伸夫「教育旅行を活用して科学を学ばせる取り組み」『日本科学教育学会研究会研究報告』第33巻第8号、日本科学教育学会、2019年6月、pp.77-82.
- 静岡大学教育学部学校支援ボランティア研究会『学校現場体験の明日を拓く 静岡大学教育学部における「学校支援ボランティア」の取り組み』静岡学術出版、2017年
- 清水紀人・中村常信・森菜穂子「中学校修学旅行時に実施される都内自主研修の実際について－H大学教育学部附属中学校の場合－」『弘前大学教育学部紀要 クロスロード』第20号分冊1、弘前大学教育学部、2016年3月、pp.39-48.
- 白幡洋三郎『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の文化』中央公論新社、1996年
- 新谷恭明「日本最初の修学旅行の記録について－平澤金之助『六州游记』の紹介」『九州大学大学院教育学研究紀要』第4号（通巻第47集）、九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門、2002年3月、pp.37-61.
- 新谷恭明「日本最初の修学旅行の記録について（続）－平澤金之助『会越游记』の紹介－」『教育基礎学研究』第7号、九州大学大学院人間環境学

- 府教育哲学・教育社会史研究室、2010年3月、pp.39-70.
- 須賀忠芳「『学ぶ観光』としての修学旅行の意義とその課題ー福島県立会津高等学校の取り組みからー」『日本国際観光学会論文集』第20号、日本国際観光学会、2013年3月、pp.97-104.
- 関信夫「学校教育における修学旅行の位置づけー主として地理教育の視点からー」『新地理』第27巻第4号、日本地理教育学会、1980年3月、pp.17-26.
- 田村英昭「教育旅行の未来 教育現場の苦悩と観光業界の期待」『安田女子大学紀要』第49号、安田女子大学、2021年2月、pp.237-246.
- 筑波大学附属中学校『生きる力を育む 修学旅行と校外学習』図書文化社、1997年
- 寺本潔・澤達大編著『観光教育への招待 社会科から地域人材育成まで』ミネルヴァ書房、2016年
- 中澤純一「中大連携における協同学習の展開と成果ー国際理解教育を手がかりとしてー」『協同と教育』第6号、日本協同教育学会、2010年4月、pp.152-154.
- 長友紀子・原山健一・萱のり子・落合恵理「『中学校と大学の連携による陶硯制作の実践』ー美術科と横断的・総合的な学習との関わりに着目してー」『連携教育開発センター』第1号、奈良国立大学機構連携教育開発センター、2023年3月、pp.63-67.
- 長友紀子・原山健一「中学校と大学の連携による陶硯制作の実践2ー地域が持つ資源を生かした学習内容の構築に向けてー」『連携教育開発センター』第2号、奈良国立大学機構連携教育開発センター、2024年3月、pp.41-46.
- 箱石匡行「修学旅行と人間形成ー社会科（公民科）教育の観点からー」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第6号、岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター、1996年3月、pp.19-30.
- 速水栄『うれしなつかし修学旅行 国民的行事に若者はどう参加したか』文春ネスコ、1999年
- 福井幸男「中大連携による中学校のビジネス教育ー西宮市公立中学校での実践記録ー」『生産管理』Vol.9,No.2（通巻第17号）、日本生産管理学会、2003年3月、pp.97-108.
- 福島真郷「中学校と大学との連携による総合的な学習の時間の新たな展開ーキャリア発達における大学生モデルの意義についてー」『福岡女子短大

紀要』第85号、福岡女子短期大学、2020年2月、pp.111-119.

福島真郷「中大連携による部活動改革の試み—大学生による『質』的支援と考察—」『福岡女子短大紀要』第89号、福岡女子短期大学、2024年2月、pp.101-113.

藤川大祐・塩田真吾「教員養成系学部における『キャリア教育』授業の試み—千葉大学教育学部とNPO法人企業教育研究会の連携—」『千葉大学教育学部研究紀要』第55巻、千葉大学教育学部、2007年2月、pp.29-35.

藤田和志・家田仁「修学旅行にみる『旅』の意義～『自己練磨型』教育旅行の導入・変容・そして現代的意義～」『第49回土木計画学研究・講演集（CD-ROM）』No.177、土木学会、2014年6月、pp.1-13.

松田淑子・志澤泰彦・村田隆家「教員養成におけるエージェンシー醸成の価値—中大連携事業支援プロセスを通じた力量形成—」『日本大学生物資源科学部「教職課程紀要」』第6号、日本大学生物資源科学部、2023年2月、pp.1-10.

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』東山書房、2018年

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』東山書房、2019年

山本志乃『団体旅行の文化史 旅の大衆化とその系譜』創元社、2021年

山本信良・今野敏彦『近代教育の天皇制イデオロギー 明治期学校行事の考察』新泉社、1973年

緩利誠・若尾良徳・津村公博「中大連携による国際理解教育の試み」『浜松学院大学研究論集』第5号、浜松学院大学、2009年3月、pp.83-94.

吉川幸男・関本努・吉田充寿・中村哲哉・河村尚代「中学生は『大学の知』から何を学ぶか—大学教員の『専門性』を生かした中学校教科学習とキャリア支援—」『学部・附属教育実践研究紀要』第16巻、山口大学教育学部附属教育実践総合センター、2017年3月、pp.41-49.

執筆分担

I とⅣは助川、Ⅱは太田、Ⅲは郡司による。